

「静寂」のひとときを大切に

校庭に子どもたちの体操の元気なかけ声がこだまし、校舎に入ると子どもたちの歌声が廊下まで聞こえてくる、教室では朗読する声が響いている、学校って本当にいいなあと思う瞬間です。そして、ノートに鉛筆を走らせる音、ページをめくる音、先生の話にシーンと聴き入る姿勢、「静寂」の空間がそこにあると、本物の学校なんだなあと感じます。

今、その「静寂」の大切さが軽く扱われ、世の中から無くなってしまうのではないかという危機感があります。ある雑誌に、以下の文が掲載されていたので紹介します。

行慶寺ルンビニ幼稚園園長 小俣昌道 氏

無心に遊んでいる一ひとつのことに集中している時の子どもは美しいものです。集中するのが困難といわれるのが幼児です。時として多動児とも見られてしまいます。

「そこでおじいさんは…」と絵本を読み聞かせているところに、一転にわかには大粒の雨が窓ガラスを打つ。お話しはそっちのけで廊下に走り出る子ども達。それを制止し絵本への集中を呼びかける保育者。子どもと一緒に廊下に出て空を見上げる保育者。あなたはどちらを是としますか？

絵本を読んでいるとき、黒いものがサッと動きました。外からの刺激に対して過去の経験の体系を動員して「カラスが飛び立ったんだ」と処理して引き続き絵本から目を離さない年長児。外的刺激に対して感覚統合が上手く働かず、防衛機能が混乱し、絵本どころではなくなってしまう年少児。

現代の幼児はテレビに育てられているといえます。過剰とも言える音声や光の刺激に曝されている幼児です。刺激過多に依存し、穏やかな活動に集中するのが困難になっている幼児の現状があります。モノ溢れの、欲しいモノは何でも手に入る今です。

少子化や一人っ子の環境の中、我慢したり譲り合う経験が乏しくなっています。つまり何でもすぐ実現しないと気の済まない、目標に向かってたゆまず努力する経験の乏しい幼児です。目先の利益や誘惑、外的刺激にうち勝つ体験を、「集団生活の中」で与えていきたいものです。

くしくも十二月は成道会（じょうどうえ）—お釈迦さまがお悟りを開かれた日をお祝いする月です。釈尊が悪魔の誘惑にうち勝った故事を紹介し、志をもち続けることの大切さを伝えたいものです。また、仏讃曲の静かに流れる中、手を合わせ目を閉じてひとときの黙想・集中の時をもつ心地よさを体験させたいものです。